

104 歳の日野原氏をモデルに

猿年のサルは「申(さる、しん)」とも書かれ十二支の中で第9番目に数えられています。例年にならない干支にまつわる諺やエピソードを探したのですが、人間に一番近いのに、あるいは逆に近い故にか、あまり前向きなものがありません。それでも思い出すいくつかを挙げてみますと：

◆猿も木から落ちる

木登り名人の猿でも木から落ちることもある。最もよく知られた諺でしょうか。どんなにその道に優れていても時には失敗をすることがある、との意ですね。



◆猿を決め込む

見ざる聞かざる言わざる、から、知らぬ振り、無視を決め込むの意。仲間内で何かが決まり、それが気に入らない。そこで「猿を決め込む」——もう少し柔軟の方が人生が楽しく開かれていくかも。

◆猿芝居

下手な芝居。あるいはすぐバレてしまうような浅はかな企み、愚かな言動の意。「ありのまま」が一番楽なのですが、ときには「猿芝居」が必要な時があるかもしれない。

◆猿に烏帽子

猿が烏帽子を被っても似合わないことから、人柄に不相応な服装や言動の意。これも「ありのまま」で自然体でいくのが良いのかも。

半面、幼少時に聞いた猿に関する話の中には、とてつもない大きな夢を誘うものもありました。そう『西遊記』の孫悟空です。筋斗雲(きんとうん)に乗って空を駆け、自在に伸縮する如意金箍棒(にょいきんこぼう)で敵をやっつける——痛快無比な話の展開でした。あくまでも物語の中ですが……

昨年暮れには仕事で身近だった方が3人も亡くなりました。年齢的には自分よりまだ少し若い。2人はガン。それも告知されてから3カ月とあまりにも短かった。もう1人は心筋梗塞でその日の朝、元気でジョギングをしていたのに夕方、体調が急変して息を引き取るという突然死でした。

今年は私も後期高齢者に入ります。この年になるといつ何が起こるか分からない。記憶力も体力も低下し、身体も硬くなっている。でも、私が生き方のモデルとしている日野原重明氏は104歳の今もお元気で新聞に毎週エッセイを執筆しています。氏にならない私も残りの人生をいかに充実させていくか、いろんな目標を掲げることにしました。

定年後のこれまでは文学紀行の取材で欧米の訪問が多かったのですが、70歳代後半は身近なアジアの国々を訪ねたい。NHKのど自慢にも再度挑戦。金婚式ではパナマを訪れ特派員時代にお世話になった皆さんに感謝を伝えたい。そして2020年の東京オリンピックにはボランティア通訳として参加したい。



最終目標は2030年の創価学会創立100周年。世界広布(仏法の世界に広め平和を築いていくこと)に最大限の貢献を目指したい。物語のドン・キホーテは愛馬ロシナンテに乗っていましたが、東京のドン・キホーテは飛行機に乗って、筋斗雲に乗った孫悟空のように広布の旅を続けていきたいと思っています。

